

たより



第 22 号

平成 25 年度学びのグレードアップ総合推進事業（教育研究所版）・県との連携講座

授業づくり研修(小学校社会科)

二見小学校 深川昭久教諭

「わたしたちの暮らしと政治～自然災害に備える～」

12月3日(火)の午後、伊勢市の学びのグレードアップ総合推進事業の研究発表と県の授業づくり研修講座を重ねて、二見小学校の深川昭久教諭に社会科授業を公開していただきました。

この日は、講師に松村勝順先生（皇學館大学非常勤講師）をお迎えし、初任者研修対象教諭・教職経験10年研修対象教諭、フューチャーカリキュラム研究メンバー、市の社会科副読本資料作成委員・歴史資料作成委員、その他にも市内外の社会科授業づくりに関心の高いみなさんに総勢約70名ご参加いただき、教室は熱気に包まれました。最初、子どもたちはいつもと違う雰囲気に対し緊張気味でしたが、すぐに学習課題に集中し、熱心な話し合い活動が進みました。

学習課題 「自然災害時に、お年寄り安全に避難できるのか」

前時に子どもたちは、地域の防災設備や施設を見学したり、家族や地域の人に聞き取り活動をしたりしたことを踏まえて、この学習課題を決定し、本時では調べたことや知ったことをもとに自分の考えを発表し合いました。



- C：地震が起きると道路が壊れるから避難しにくい。
- C：聞き取りで聞いたけど、体がつつかどうか心配と言っていたから安全には避難しにくい。
- C：聞き取りで聞いたけど、一人では安全に思うようには避難しにくい。
- C：避難は何とかできて安全には難しい。お年寄りのことばかり気にしてられない。
- C：自分のことは自分で守らなくてはならないので、お年寄りを助けてられない。
- C：区と区を回ってきたけど、トランスやブロックや電信柱が倒れてきたら、そこまで対処できない。
- C：崩れてきたら危ない。
- C：聞き取りで聞いたけど、足や膝が痛いから避難は無理と言っていた。
- C：区や区のお年寄りの人たちは橋まで逃げなければいけないので、距離がある。
- C：うちのおばあちゃんは区の方に住んでいるので、安全に避難するのは難しい。
- C：無理だと思う。
- C：しにくいと思う。理由は、子どもや大人でも台風で工場倒れるほどなら、家もつぶれるから逃げられないから。
- C：一年前に二見小中で避難訓練をしたときに、30分以上かかっていた。最高の状況でも避難するのがたいへんだったから、避難しにくいと思う。
- T：今の分かる？
- C：地震も何も無い、予告しとる状況でも時間がかかるのに、地震が起きたらもっと難しい。



子どもたちから出された意見はすべて、「安全に避難しにくい。」「できない。」という意見だったため、深川先生は「避難できると考える人は？」と揺さぶりをかけられました。「避難場所が近い人は避難できるかもしれんけど、避難できる人もできない人もいる。」という子どもの意見を受けて、深川先生は「一人でも避難ができなかったら困るな。避難しにくいということやな。」と話されると、子どもから「次は、どうやったら安全に避難できるのかを考える。」と発言が続きました。

学習課題 「お年寄りが安全に避難できるようにするにはどうしたらいいか」

- C：避難所まで避難する道の整備をしたらいい。
- C：道をお年寄りが避難しやすいようにしたらいいと思う。
- T：ということは？
- C：階段をスロープにしたり～。
- C：ブロックの整備や電信柱・トランスの頑丈な固定や道が壊れないようにいつも整備しておいたらいい。避難所も整備しておくといい。
- T：避難所を整備しておくとは？
- C：食料を毎月確認したり、食料が二見町の全員に渡るようにする。避難できた人がそこで快適に過ごせるようにする。
- C：塀のブロックは倒れないように固定をした方がいいと思った。
- C：ブロック塀は個人のものだと思うけどどうするの？
- C：新築の人には鉄の棒を入れるように呼びかけをした方がいいと思う。入れてない家は無茶なようやけど、崩して棒を入れるように～。
- T：呼びかけはどこもしてないの？
- C：呼びかけとるの見たことない。
- C：呼びかけは誰がするの？
- C：市の職員がしたらいい。



話題は「公助」に向かいかけ、その後最初に出された意見の「お年寄りのことばかり気にしてられない」というところに移りました。

さて、どうしたらいいのか...子どもたちは一生懸命考えました。「若い人が助ければいい。」「自分は子どもだけど、できることはする。」「自分の命が守れる範囲のことをすればいい。」「そのときにできることをしたらいい。」と意見は続きました。さらに「一

- C：いろんな人が助け合って避難したらいい。
- T：いろんな人って誰？
- C：普通の人ら。
- C：消防団、老人センターの介護をする人...町の人。
- T：他にどうですか？どうやったら安全に避難できるか？
- C：いろんな人が助け合ったらいい。
- C：若い人というより...若い人ばかりに押しつけてしまうことになるので、男女を問わずいろんな人。範囲が、人の種類が多いから。
- C：老人もいい？
- C：できる範囲のことで...道案内したらいい。
- C：道案内したり、少しついていっていい。(連れていく)
- C：お年寄りでも木に登れるくらいの人もいたので、車いすの人は助けられる。
- T：実はこんな制度があります。(プリントを配付)

「災害時要援護者登録制度」を提示

人で助けるのではなくて、他の人を呼ぶ。」「時間が迫ってきたら救助中でも逃げる。若い人も自分の命がなくなるといかん。」と意見は深まっていきました。この場面のキーワードは「共助」でした。

深川先生は授業の最後に伊勢市の「災害時要援護者登録制度」の告知プリントを配付されました。社会科学習として「公助」(政治)の取組の一つを子どもたちに学ばせたいという考えからでした。このプリントの内容は「共助」と「公

助」をつなぐものです。これからも続く「公助」学習の入り口でもあります。

授業者深川先生の思い



深川先生は常々「地域を大事にしたい」と考え、子どもたちが地域に出て聞き取ったり、取材に動き回ったりする社会科学習を進めておられます。今回、6年生の児童と地方自治について学習するにあたり、地域の切実な問題「自然災害に備えること」に焦点をあてたいと考え、この小単元を設定されたのです。

研究協議の中で出された意見は...

以前に担任した子どもたちの成長した姿が嬉しかった。発言の人数は限られていたが、仲間の発言を分かりやすく言い直すなど、支え合う姿があった。個を生かし認め合う優しい集団に育っていた。

子どもたちに仲間の意見を聞く姿勢ができあがっていた。

表現する力がしっかりついている。調べたことや経験をもとに話すことができおり鍛えられている。積極的に言語活動を取り入れていくことで身に付いてきている。



二見小学校では全国学力学習状況調査の結果から、児童の言語能力が学力に影響しているという分析に至りました。現在、全校児童・教職員でコミュニケーション力を育むことを大切にしようとされています。「はい」と返事すること、語尾に「です。」「ます。」をつけること、あいさつをすることから基盤づくりをしているということです。

発言の途中で「分かりません。」と言った児童に、「『道路の整備をしたらいい。』と言えたから頑張ったな。」という言葉かけをされたのがすばらしかった。

「私は、若い人ばかりに押し付けず～」という発言がすばらしかった。

最後に提示した資料の中に「登録したからといって、決して安心してはいけません。」とあることからさらに「共助」が大事だと感じる。この制度を知った子どもたちが今後「公助」と「共助」をどのようにつなげていくのか興味深い。

タイミングよく指導者からの確かな投げかけがされていた。「今のは何?」「いろんな人とは?」などの問いかけで思考が広がったり深まったりする授業だった。子どもたちからも仲間の意見に投げかけがあった。

深川先生は「授業の節(ふし)は子どもたちがつくるものであると考えているので、本時の自分の出場は本当はよくなかったと思っている。」と振り返りをされました。

すばらしい子どもたちを育てていただいている。授業者の出もすばらしい。最高の状況で避難訓練を行ったことについて説明した児童の発言を受けて、すかさず「分かる?」と子どもたちの様子を見回し、別の児童に発言させた場面、「ここ聞きたい。」と投げかけた場面もすばらしく、フォローもしっかりされている。「区や 区のお年寄りの人たち

は 橋まで逃げなければいけない。」と切実性のある発言もあった。さらに具体的に、この両地区の地域の人にも聞き取りをさせたいところである。「共助」については、たっぴりと話し合われたので、ブロック塀の補強等について「公助」としての助成制度の例を挙げることも提案したい。



6年生の社会科学習としては、「公助」にもっと踏み込みたいところである。今日の子どもたちの様子から聞き取りが確かな裏付けとなって一生懸命発表できていたが、制度等についてさらに学ばせ、知識的な裏付けをもたせたい。なかなか意見が言えない子どももいたが全員が授業に参加できていた。

これからの社会科授業の流れとして、防災教育がさらに入ってくると感じている。伊勢市の社会科副読本「わたしたちの伊勢市」では防災に関する内容が10ページに渡って書かれている。先駆けとなっている。

発言の中身が深かった。これまでの学習がつながっていたと感じた。発表をしなかった子どもたちもボソボソと隣同士で話していた。

子どもたちの発言の中には、避難訓練で体感したことが見事に生かされていた。

講評 松村勝順先生より

子どもたちを切実性のある場面に追い込んでいるいい授業だった。成功させている理由は、深川先生が時間をかけて準備し、手立てを講じていることにある。子どもたちは聞き取りや地域に出て学んだことを生かして、自分の意見を言いたくてチャンスをうかがっている様子だった。深川先生に授業の流し方や授業規律づくりなどテクニックがあるということだけではなく、もともとの授業構築の部分からきちんとたたいていたからこそうまくいくのである。

今回の指導案作成の前段階として、研究所を介して3回に渡って「考える会」を開催したが、それはこれまで関わってきた研究授業がともすると授業者の個業で進められてきたのではないかという思いがあったからである。会の参加者の一人として、だんだんと指導案が変化していくのを目の当たりにすることができ、勉強になった。ここにそのときのメンバーがいるが、皆もそう感じていることと思う。

授業研究を通しての協働性が今こそ必要であると考えます。



研究会（研修講座）の開催にあたり、二見小学校の先生方には会場設営や日課変更等でたいへんお世話になりました。

松村先生のお話にもありましたが、若手教員とベテラン教員が一同に会して有意義な研修の時間をともにできたことを本当に嬉しく思います。

みなさんありがとうございました。

